

私は、終戦の翌年大学を卒業、一年あまり京都にいて郷里に引き上げ、その後先生にお逢せずじまいなので、あの頃の先生の、色白のお顔にやややくみをおびられた、いたいたしい印象が、脳裏に刻まれていて、それがこの度の悲報と直接結びつくのをどうしようもなかった。やはり戦争がいけなかったのだ。

あの頃の御無理が、これからいよいよ貴重な御研究を集大成なさらねばならぬ尊い先生のお命をお縮めたのだ、そういう思いがしきりにして、一しお先生の御逝去が悔まれてならない。

・学生時代、私どもは先生から、建礼門院右京大夫集や兩月物語などの御講義を拝聴した。爆弾の洗礼を免かれた京都でも、毎日のように警戒警報や空襲警報が発令されていた頃であった。われわれ学生の気持はともすればうわつて学問から離れがちであった。しかし、先生の教壇の御態度は終始一貫して真摯であられた。一字一句もゆるがせにされず、あらゆる資料をあげて御講義をなさる先生の御態度には、時勢の変動などに左右されぬ、学問への深い愛情と、不動の信念がにじみ出ていた。あるいは、人は、象牙の塔にこ

もるとか、学問のための学問とか、けなしもしようが、こうした先生の御態度が、どれだけわれわれの失われ勝負学問への情熱をふるいたたせて下さったことか。

短軀・童顔・柔和さそのものの肉体の深奥に、学問への不屈の情熱を静かに燃えたぎらせていた。先生はそういうお方であられた。

たしか終戦の年の春だったか、当時私は学童疎開に付き添って、香川県白峯山陵の麓の松山村にいたが、先生から、清水先生と御一緒に緒して、そちらへ行きたいから宿や案内をたのむとの御便りを頂いた。白峯御陵は崇徳上皇をめぐって、先生の御専門の軍記物語と大いにかかわりがあり、その上兩月物語にも取材されているので、実地に御踏査なさる御気持からであられたと思う。私は、先生を御案内する光栄に胸をおどらせ、その日を様しみに、色々資料なども蒐めて御待ちしていた。

ところが、当時の急迫した状態で、遂に汽車の切符が入手出来ず、やむなく中止なさる旨の御通知があつた。せっかく楽しみにしていらつしやつたのにと残念でたまらなかつた。

そんなこともあって、私は先生の御講義に出られない埋め合わせのレポートに「白峯山陵

と軍記物語」という雑文を御送りした。粗雑なものなのに、当地の伝説などが目新しかったせいもあつたか、先生からお褒めのはがきを頂いて恐縮したことがあつた。

今年の夏休みに、私の学校の文学散歩班を連れて白峯御陵に行くことが決まった。その日、ゆくりなくも先生御逝去の御便りに接し、感慨うたた無量であつた。同じ四国の地に住んでいる私は、いつかよい機会を得てと期待していたのに、もう永遠に白峯に先生のお伴をする日は失われてしまった。

松山の波の景色はかはらじを

かたなく君はなりましにけり

崇徳上皇を偲び奉つた西行のこの歌が実感をもって口ずさまれてならない。今はただ、白峯御陵に先生の御冥福をお祈りする日を持つばかりである。(昭和二十年九月卒、徳島城南高校教諭)

後藤丹治先生

田口正直

後藤先生に親しく御講義をお受けした時から、はやくも七年の歳月が経つ。その御講義

も、二部の学生であった私は、わずかに学部
の二年間と、中退してしまつた大学院の一年
間だけであるから、もとより先生の偉大さを
知ること必ずしも多くない。むしろ、少なき
に過ぎる。偉大なる先生について語るには不
適当である。しかし、その僅か三年間は、私
にとつて忘れ難い思い出の三年間であつた。

先生はまれにみる篤学の士であられた。学
を愛されること、真に色を好むが如くであ
り、孜々としてその一生を学び通された方
であつた。一度、先生のお宅にお伺ひした時、
先生は温顔をほころばせて、こう語られた。

「私は自分に才能があつたとは決して思いま
せん。私が今日あるのは、学校を卒業して
も、一つのことをこつこつと努力し続けて来
たからだと思ひます。私の在学中の友達にも
秀才はたくさんいましたが、その多くは学校
を出ると勉強をやめてしまつたようです。」
と。

また、先生は一字をも一語をもゆるがせに
されない方であつた。御自分の納得のいかれ
るまで、徹底的に調べられる方であつた。そ
のことは、先生の御講義のどの一時間をとつ
てみてもうかがわれた。われわれだつたら、

そのまま読み過ごしてしまふようなことば一
つをもゆるがせにせられなかつた。『天人』
とは、想像上の人物にして、頭には華鬘を有
し、身には天の羽衣をまとい、空中を飛翔し
て、舞曲を奏す」という「滝口入道」の御講
義の一節が、私の耳に今もありありと聞こえ
てくる思ひがする。私が字だけはまちがうま
いと思うようになったのも、けだし先生の不
断に影響されることが多かつたようである。

ある時先生に廊下で、先週休んでお聞きする
ことを得なかつた「恋路は六つに変われども」
の箇所を質問申し上げたら、「ちよつと待っ
て下さい。」と言われ、研究室からノートを持
つて来られて、「えー ありました。あり
ました。このことばは、楊牛の独創ではな
く、近松門左衛門『国姓爺後日合戦』の中
に『夢路は六つに変われども……』とあるのを、
楊牛が『恋路は……』と変えて用いたもので
す。訳しますと、恋の様相はいろいろさま
ざまではあるが……』と懇切に説いて下さつ
た。それまで、教科書一つ持つて教壇に立
ち、その教科書の中にも何も書き込みをして
いないのを誇りとして私が、調べたことや心
覚えを殊勝にノートして、そのノートを携え

て授業に赴くようになったのも、この時の先
生のお姿に反省させられたからにはかならな
い。

先生はまた、謹直な方であられた。学生が
先生の御講義中に勝手に隣の者と話をしてい
ると言いくそうではあつたが、必ず「話を
やめて下さい。」と注意された。また、心な
い学生の質問に対しては、少年の如くむきに
なつて応酬された。

しかし、先生はまた、まれにみる好人物で
もあられた。ある日の御講義の時「きよう、
「雨月物語」の撮影で、撮影所に呼ばれ、京
マチ子君に初めて会いましたが、京マチ子君
というのは、実にきれいですね……」と感に
堪えぬごとく、頬を赤らめて語られたが、日
頃の先生の謹厳ぶりには見られぬ、なんと
言えぬほのほとした感じが教室に漂い、先
生の人柄のよさに心うたれたことだつた。漏
れ承る所によれば、先生の御令聞は、京マチ
子のような美人であられるとか。

私の敬慕おく能わざるその先生も今やな
い。毎年頂いていた、先生の謹直さのしのば
れる賀状も、今後永久に頂戴できないこと
になつた。先生の如き篤学の士を失つたこと

は、小にしては私にとって、大にしては国文学界にとって惜しみてなお余りあることである。

しかし、先生の業績は、長く学界に寄与し、また、私の思い出の中にある。弟子として慰められるのは、古典文学大系中の「太平記」「椿説弓張月」校注の大業が畢られ、それを繙くことよって、先生の御講義ぶりが偲ばれることである。(昭和二十九年三月卒、京都市立洛南中学校教諭)

後藤丹治先生を偲ぶ

長 田 久 男

昨年十月、先生が大阪学芸大学を停年退官なさった直後のことである。先生は、大槻文彦博士が大言海の編纂を始めたのは六十六才の時であったという例をお引きになって、今後の予定のお仕事を指折りかぞえ、「この勘定ではまだ十年は生きていなければならぬ。」とおっしゃったことがあった。

日本古典文学大系(岩波書店)第二期に、「曾我物語」の注釈をなさるはずであった先生は、その仕事の助手を私に言いつけられ

た。そのため、私は、先生にお目にかかる機会が多かった。世間話しをめつたになさらなかっただけに、先生が折にふれてお話しくださったことには、かえりみて味わうべきことがらが多い。

古典作品の注釈の仕事が難事業であることをおっしゃったことがある。その時、私は注釈について無遠慮な質問をした。すると、先生は、注釈におよそ三つの段階のあることを指摘された。第一段階は、現代語に言いかえる程度の注釈、第二段階は、その作品の成立した時代の言語意識をとり入れた注釈、第三段階は、作者の言語意識、表現意識に即した注釈の三つである。第三が目標であることは無論である。古典文学大系の第一期でなされた「椿説弓張月」の注釈は、この第三段階に近いものと、その時のお話から推察した。

「曾我物語はどの段階ですか」とお伺いしたら、「第二と第三の中間位かな」とおっしゃった。そして、「いずれにしても第三の段階の注釈は難事業である。しかし、後世に残る注釈書をかきたいものだ。」とおっしゃった。「戦記物語の研究」を専攻していなかった私が、こうした仕事の助手を言いつけられ

たことは、過分のことであり、かつ、ありがたいことであった。不肖の弟子というべきだろう。広島高等師範学校を終えて京都に勤務していた私は、立命館大学の大学院に学び、先生に平家物語の講義と太平記の演習とをうけた。和讃混淆文についての国語学的考察に関心をもっていた私には、先生の講義と演習は感銘深かつた。「戦記物語の研究を専攻してみないか」と先生にすすめられたことがある。一回は大学院のとき、一回は平家物語注釈のお手伝いにかけてした頃である。二回とも、「国語学を専攻したい」とお答えした。その後はすすめられなかつた。むしろ国語学の研究にいろいろのヒントを与えてくださったのもその一つである。「文章語の研究にも関心を持って」とおっしゃったのもその一つである。先生が戦記物語の語彙辞典の編纂に関心と計画をお持ちになっていらつしやることを知ったのもその頃である。

先生に最後にお目にかかったのは、本年四月十三日(土)の午後でした。退官記念の出版「国文学叢考」に「謹呈」と記して二冊くださつた。それを前にして、御自身の研究歴について思い出ふうにお話しくださった。そ